

これからの保育を考える

児 玉 省



経済成長、技術革新、人間とその発達に関する新しい科学的知見、社会事情の変化と新しい社会風潮の台頭などによって、あらゆる教育思想が問われているのが現状である。ことに幼児教育に関する考え方や実践は動揺が著しいものがあるようにある。私たち保育に関係のある者は、この時にいかに考え、いかに対処すべきであろうか。これは私たちの誰もが考えなければならぬ問題である。この難問に多少なりとも私なりの自問自答をしようとするのが本文の目的である。

まず保育界の現状を見よう。保育というのをきわめて広い幼児教育の意味にとってみると、幼稚園、保育所のなかだけでなく、それを取りまく家庭や社会では、幼児に対する知育偏重的傾向が著しい。小学校の下うけ的な教・科・的・教・育を行なっている幼稚園や保育所はかなりある。ワークブックを使い、字や数等を教えている。他方小学校では、新入一年生が始めからある程度の漢字を知っていることを期待している。字や数を教えること

は、幼稚園や保育所の看板になっていく向きもある。一方これと対立するかのようになり、自由カリキュラムで、児童が自分らの思うように動き遊び回ることをもってその教育方針としているところもある。もちろん自由カリキュラムに対立するものとしてはシーケンス・カリキュラムがあり、保育雑誌から写したような整然としたカリキュラムでがんじがらめにしはっているところもある。

これらを支える根拠としては、ブレイベルに還れ！ ルツソーに還れ！ モンテッソーリの再発見！ ピアジェの発達理論、ソビエトの幼児心理学などが入り混じっている。さらに一昨年発表された中教審の答申は、さらにこのデイスカッションに拍車をかけたようである。いつの世にも対立はあり、対立があること自体は望ましい姿であろうが、自らの立場を持たない者は、時流に流され、または進路を見誤り、または見失う危険があるであろう。

紙数の関係で、端的に問題に入っていくと、いい保育とは何であるか？ 幼児の望ましい成長発達を守り促進するための取扱いと指導である。

望ましい発達とは何であるか？

1、子どもが一人の人間として最大限に発達し、自己を実現し、かつ社会生活を楽しみ、社会に貢献し得るようになることである。

2、将来のあり方を達成する手段として、途中の過程について、将来にだけもっぱら眼をつければいいという考え方が相当根強いものであるようであるが、筆者はデュイーのいうように、発達の過程の一こま一こまが、子どもにとって満足なものではなくてはならないと思う。その積み重ねこそが、将来の望ましさを真に確保するゆえんである。能力も人柄も、現在から将来へと、連続して変化成長していくものである。このことが忘れられていることが多い。

3、バランスのとれた発達こそ望ましい。一人前の人間としては、個性、自主性、獨創性が必要であるが、発達過程においても、その年齢なりのバランスがとれていることが望ましい。バランスは、子どもの精神的安定に連なるものであるし、またかつ、将来の望ましい発達を促進し約束するものであるからである。バランスのとれていない子どもについてはバランスを獲

得させることが必要である。

ここにはたくさん問題を含んでいるが、いくつかを拾ってみると、たとえば、本や積木ばかりで遊んで、友だちのない、体を使った遊びをしない子どもは、バランス欠如型であるが、こういう子どもは、子どもの生活を楽しむことも少ないし、性格的にもかたよるし、知的発達さえも阻害されることがある。

筆者が藤田復生先生のお手伝いをして調べているゆかり文化幼稚園の卒園児の調査では、幼稚園時代に健康で、運動能力があり、社会性の発達していた子どもは、その後の追跡調査で少年期においてもよき発達を示し、知的能力さえも優秀になっていたものが多いことが示されている。幼稚園時に字が書けた読めただけということは、後年のよき発達―知的発達をふくめて―を保証していないのである。

前の箇条書きのなかでは、こともなげに人柄とか、性格とか社会性とかいったが、これこそは子どもの発達の土台になるものであって、子どもの将来のあり方と幸福を約束する最も重要なものではなからうか。

それではいかなる保育が望ましいであろうか？ 保育の方法は、百人百様で、それを十把一からげにとりあげることはできない。しかし、大要の問題点をデイスカッスすることはできる

であろう。

まず、保育方法に自由保育と集団保育の問題がある。端的にいうと、現実では集団保育が多過ぎるのではないであろうか。筆者は集団保育の価値を無視するものではない。たとえば、集団とともに行動し、その集団のきまりに承服し、集団における自分の役割を果たすことを学ぶことは、どの子どもも身につけなければならぬ訓練である。それは社会性の一面でさえある。しかし集団保育だけに頼っているのは、自主性や個性の伸長をばむ可能性がある。現にそういうものの欠けている子どもを随所に見ることができ。

自由遊びの中でこそ、はじめてよくつちかわれるものがある。今述べたような自分で考え自分でやりとげるといふ自主性と、他人とちがった考えや立場を持ちそれを主張し得る個性などの重要な性格面だけでなく、物事に真に没入してそれを楽しみ、また自分の新しい考え方ややり方を見いだす創造性もまた、しばしば自由遊戯の中に展開するものであることはよく知られていることである。

自由カリキュラムと、シーケンス・カリキュラムの問題もまた前述したことに連なることが多い。集団保育がシーケンス・カリキュラムに関係が多く、自由遊びは、自由カリキュラムに関連するところが多い。もちろん自由遊びと自由カリキュラム

とは同一物ではない。自由遊びは、シーケンス・カリキュラムの中で的一部分であっても、さし支えないからである。シーケンス・カリキュラムについても、筆者はそれを全面的に拒否するものではない。ただあまりにも、細かく規定し保育を進めることは、自由遊びの時間を減少させることのほか、かつ、もっと重要なことは、子ども自身から、自由な伸び伸びとした活動とふんい気を奪うことになることである。子どもは、がんじがらめからんだわくの中で生きることではなくて、自ら思うような活動にしたがい、工夫も独創性も、忍耐も努力も、その自由な活動の中——ほかの子どもといっしょになつた——で伸びることこそ望ましいものと考ええる。社会性もこういう生活の中でこそ自然の発達を示すであろう。

この問題はルッソーの自然に還れの考えに導いていくことに気がつく。自然とは何か？ という問題はむずかしい問題であるが、与えられた保育環境だけにしばって考えると、保育者の干渉の手が加わらない状態において自己保育することではないであろうか。子どもどうしがお互いに、言いあつたり、けんかしたり、助け合つたりするうちに、自然に対人関係を学び、また少々は石につまづいてけがをしたり、木に登つてすべつたりしているあいだに運動能力や体力の発達を獲得する——こういう状態こそ子どもたちが保育的に伸びていくという考え方であ

ろう。これに対して訓練派は、保育者が子どものあるべき姿を想定して、それに積極的に子どもたちを近づけて行こうとするのである。この両者の対立はいつの世にもあることであって、永遠の課題であるかもしれない。

さて、保育とは何であるか？ 子どもの望ましい発達とは何であるか？ それを実現するための方法について、大まかながらいくつかの立場について考察を加えてきたが、最後にこれらの望ましい保育とは何であるか？ の課題に対する筆者の考えを述べることにしたい。

1、保育の目標は、子どもが心身ともに一人の人間として望ましい発達をするための指導である。

2、そしてその発達のありさまは、将来に目標をかかげて、途中の経過は考えないで目標に向かって保育することではない。たとえば将来えらくなるために勉強するのであって、途中の状態がどうであろうが、問題ではないといった、かつての考え方は、今もなおかなり行なわれているが、この考え方が、子どもの児童期を無味乾燥な灰色のものにし、子どもの豊かな情操や個性や獨創性などを育てないで殺している。どこかにひそんでいるこういう考えこそ、危険なものである。子どもは、発達の各段階を楽しみながら、知的にも情操的にも社会的にも成

長すべきである。そう保育すべきである。

3、子どもの身心の、また各機能の発達のバランスを促進することが大切である。人間一人前になれば、各人職業ごとに能力も生活も専門化または特殊化してくるが、児童期のころから、子どもの発達をかたよらせてはいけない。かたよった発達は子どもの不適応にも連なるし、また望ましい発達の邪魔になるであろう。バランスは子どもの身体的発達促進のための必須条件である。知的発達にとってさえも、このバランスの上にこそ、望ましい知的発達が生まれるであろう。

4、現在の幼児は、平均的にいってその発達がいびつになっている傾向がある。運動能力は、戦前の食料不足の時代の子どもよりも劣っているし、日本保育学会の研究では一九五四年と一九六九年の幼児を各七千名以上調査したが、一九六九年の幼児は十五年前の子どもに比べて運動能力が落ちてきているし、社会性の発達もおくれている。保育というものが抽象的なものでなくて、現実の子どもを相手にしている以上は、これからの保育の一つの課題はこの子どもにおける発達のひずみを直すことではないなければならない。また今の幼児には情報的にも反省すべき点がある。

5、世の中が複雑になるにつれ、また文化が進むにつれて、児童が身につけることを要求せられる知識や技術もまた増大す

ることは当然である。その意味において、筆者は児童の知的開発に反対するものではない。むしろ、この知的能力の伸長を望むものでもある。世界の各国もまたそういうことを考えているようである。ただしこれにはいくつかの大切な条件がある。

知的開発が、児童の他の心身的機能の発達に犠牲性において行なわれてはならない。知育偏重などこのバランスを無視した考え方である。知的開発を行なうとしたら、それは環境を豊かにし、子どもの生活と遊びを通じて、その知的能力が自ずと伸びるよう考える。かつ当然精神発達原則にのっとること。このことは場合によると、健康で愉快に楽しく遊んで幼稚園で過ごすことにもなる可能性がある。

たとえば、幼児の知的発達はその知覚運動的知能から出発し、環境との接触、対人接触の間に促進せられていくこと——これはピアジェ的な理論。さらに最近のソビエトの研究では、幼児の記憶は、憶えようとした記憶よりも、憶えようとしなくて何かしている時に、憶えたものの方が、記憶として残りやすいという知見。幼児の言葉は行動に伴って発達するという知見。また遊戯こそ子どもの感情的安定や柔軟さ、工夫、発見を与える機会であるという知見、いずれも、知的発達を求めるとしても、ワークブックや暗記などによる方法が、むしろ非能率的であることを示すものである。大阪の、聖和女子大学での研究では、

幼稚園時に漢字を教えておいた組と、全然教えなかった組が、小学校に進学した時、一年生の終りには、両者間に字についての能力に差がなかったことを示している。国立国語研究所の研究でも、幼児で字をよく習得した子どもは、家で字を教えることをしなかった。ただし知的遊具——積木、絵本など——を与えていた家庭の子どもであって、字を教えこもうとした家庭の子どもの方が習得能力がおちていることを示している。

能力の働き具合に適しない方法で物事を教えたり、生活の中で使いもしないような物事を教えても、たいして物にならないことを示すものである。いわんや知育偏重派の教育は、子どもも体力や人柄などの望ましい発達を阻害する結果になっていくことが多いのを考えると、大きい誤りをおかしているといふべきであろう。

6、最後に——むやみな産業開発は公害を生んでいる。むやみな企業によるまたは個人の利潤追求は社会的利益に合致しないことが今ごろになってわかってきた。競争社会の中で競争だけを目標にした教育は、望ましい教育とは言えないではなからうか。筆者は経済的なことを問題にするのではないが、親の教育理念が競争意識を離脱して、自分の子と他の子どもたちとの共通の幸福を求め、共通の福祉を求める方向に向かうべきものと思う。保育はこういう方向づけを頭におくべきではなからうか。